

2021年度
地球環境『自然学』講座
第18回

テーマ

いにしへに学ぶ
—三千年の未来へ—

講師

詩人・作家

丹治 富美子 先生

2022年3月19日

認定NPO法人・シニア自然大学校



丹治富美子 Fumiko TANJI

NPO 法人アースウォッチ・ジャパン プログラム検討委員
元東京農業大学非常勤講師、香道古心流・丹治瑛峰
元日韓音楽交流会会長、日本風土学会会員

五感で読む「源氏物語」の研究をライフワークとし、森に生きることを通して大自然の中で「美しく生きる」ことを探求し、詩、随筆やオペラなどに表現している。

[詩と音楽]

詩は国内外の作曲家によって作曲され、詩をテーマにしたピアノ曲・器楽曲と合わせて百曲に及び、アメリカ・ロシア・中国・韓国において演奏されている。

著書の歌物語り「風色の日々」の詩が作曲され、カワイ出版より楽譜となり出版されている。音と文学の融合により新しい音楽の世界を編み出し、モノオペラ「髪の章」「露の章」「風色の日々」を日韓音楽交流会にて、韓国建国大学校元教授 黄哲益氏、淑明女子大学元学長 許芳子氏の作曲により两国にて上演。

グランドオペラでは「三千年の未来へのメッセージ」を託したオペラ「みづち」の脚本を創作し、多数上演されている。

- ・第16回国民文化祭・ぐんま2001／高崎音楽センター、
- ・群馬県民文化祭／笠懸文化ホール
- ・日本オペラ協会・群馬県共催／新国立劇場
- ・群馬オペラ協会／前橋文化会館
- ・第32回全国高等学校総合文化祭／鎗木ホール
- ・国立音楽大学、東京音楽大学、東京農業大学、法政大学、お茶の水女子大学
- ・全国源流シンポジウム

[随筆]

森に暮らす日々、加速し続ける文明を危惧し、自然とともに生きることの豊かさを優しい言葉でつづる随筆を執筆。

- ・「土木施工」（山海堂刊）に「風の記憶」を連載。
- ・教育者のための科学雑誌「Science Window」にエッセイ「風の譜」を連載。
- ・森林再生プロジェクトの情報誌「森の鼓動」に巻頭エッセイ「木精する森」を連載。
- ・森林関係者の機関誌「山林」（大日本山林会）に「森の採譜」を連載中。（2011.4～）

[歌碑]

- ・南相木ダムに自然との共生を問いかける歌物語「水底の詩」が21基の歌碑に刻まれる。
- ・源流の森の恵みと流域を結ぶ「多摩源流黎明祭」にて記念歌碑として建立される。

[校歌作詞]

- ・群馬県立清明高等学校校歌
- ・高崎市立桜山小学校校歌

[講義]

- ・東京農業大学・地域環境科学部にて「いにしへに学ぶ」を講義。（2008年～2016年）

危機からの創生

高度成長期に差しかかる頃、これ以上の文明は私には必要ないと決断し、森に住み、自然と対話する生き方を始めた。森に暮らす日々、私の生き方はあの頃と少しも変わらない。

この二十数年間で私の生活に持ち込まれたのは、携帯電話とパソコンが加わったことであろうか。

人類の限りない欲望のつけは、そう遠くない未来にまわって来るであろうと危惧していたが、私の思いより遙かに速い速度で地球温暖化は進んでいたのである。

昨今、気候変動による災害は想像を絶するほどに大きい。

まるでパンドラの箱を開けたような化石燃料の出現は、わずか二百年で地球に住む人類を破滅へと導き、地球がもたらしてくれた奇跡ともいえる環境を破壊し続けている。

感染症との闘いの歴史は人類の誕生とともに始まり、時として今回のような新型ウイルスとなり勢力を増すが、それを抑える叡智を持っているであろう。

しかし、七十七億人の人類にとって、このまま化石燃料に頼る生き方を変えなければもはや未来はない。

森に暮らす日々を 風の暦 風の記憶 森の採譜 等々に書き綴ってきた。

そして、音と文学の融合の世界を追求する中、二〇〇〇年にオペラ「みづち」を書き上げた。

日本語の美しい言葉は、美しい魂を育み、その美しい魂は「美しいふるさと」 やがて「美しい国」「美しい地球」へと導くにちがいない。

小さな国日本が「美しい国」としての手本となることを願う。

二〇二二年三月

丹治 富美子

三千年の未来へ

— みづちとは —

このオペラのタイトル「みづち」の由来であるが、「みづち」とは四つの足を持ち、頭には角があり、体は鱗で覆われた蛇に似た想像上の動物である。

毒を吐いて人間に害を及ぼすとされ怖れられていたらしい。

「みづち」は広く一般にこのように周知されている言葉である。

オペラ「みづち」は、自然の営みの中で生きることと遠ざける文明のあり方を憂い、警鐘を鳴らす思いの限りを音楽の総合芸術であるオペラに託したものである。

「みづち」は古典からその語源を探ることができる。

「み」は水を表し、「つ」は現代語では「の」を表す助詞である。

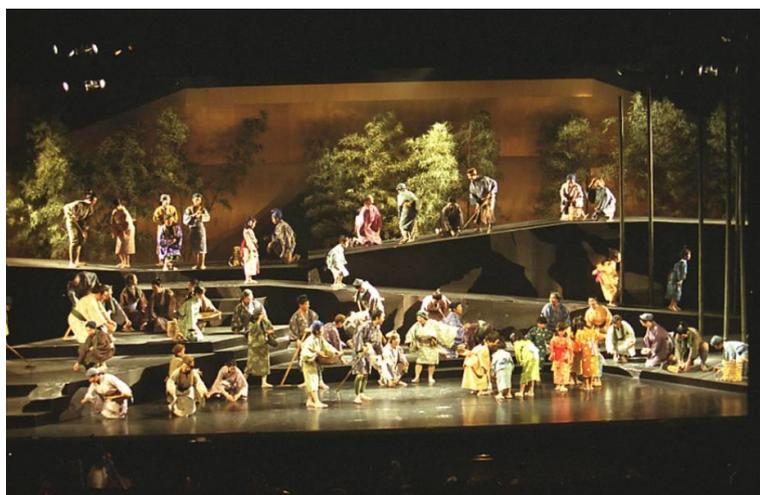
「ち」は霊であり、「みづち」は水の精霊ということになるのである。

このオペラの中では「みづち」は水を司る自然界の神と位置づけた。

四季折々にふる雨や雪が、地中深くしみ入り、遙かなる時を経て、再び地上にあふれ出る摂理を知る時、水はすべての生物に与えられる地球の魂の雫に思えてならない。

生物の起源をたどれば、それは想像をはるかに超える時を隔てた海からの誕生であり、我々人間が今、個として存在しうるのも水の惑星と言われる、母なる地球から受けた命なのである。

「みづち」は、人類が万物の上に君臨し地球を支配しているというおごりを棄て、この母なる地球上に生かされているということを感じつぐためにこの世に送り出したメッセージヤーである。



— 歌物語り —

脚本の中に歌物語りの形式を取り入れた。歌物語りとは、古典の中の伊勢物語、大和物語等をさすが、私の中では定義に満たないまでも源氏物語もまた視野にある。

歌物語りの歌とは、日本古来の伝統である和歌(短歌)のことであり、物語の中で和歌が主軸をなすストーリーが展開していく。

オペラは会話で物語りが進行していくが、オペラの中のアリアも会話の中の一部であるため、叙情性、詩情性に乏しい。

これまでも作品を書きながらアリアを美しく浮かび上がらせることはできないものか、又、単独でコンサート等で歌曲として歌われるための魅力ある曲にするためにはと試行錯誤をしていく中で、長い間古典の中にいる者として浮かび上がった手法である。

歌物語りの中の和歌の部分に詩や和歌にし、詞書きの箇所をオペラの中では会話にし、ストーリーを進行させればよいのではないかとの思いに至ったのである。

三幕目の小太郎と夕月姫の場面では、相聞歌を取り入れ、二人は互いの思いを贈答歌の形式で交しあい、星に導かれるような出会い美しい愛の二重唱となっている。

歌物語りがまさしく、音を伴った歌物語りとなったのである。



夕月姫 問うてみる

すべも知らずに

人を恋ふ

真夜にこぼれし

星一つ

小太郎 我が胸に

こぼれし真夜の

星一つ

さがしあぐねし

星なりし

小太郎 あしひきの幾山越えて

めぐり逢ふ

苦しみの旅

今ぞ終わりぬ

夕月姫 重ねきし

わが日々も君に逢う

心の旅の

君に逢ふ旅



古語には美しい言葉が沢山あり、時代をも考慮して、アリアでは古語をちりばめるように使った。

音楽は瞬間芸術であり、即座に理解されることが要求され、文学作品としての表現と、音を伴う言葉としての狭間で常に苦しみながら、最小限の表現にとどめた。

今日果てしなく日本語が乱れていくなかで、このオペラを通して美しい日本語を蘇らせる意識が生まれることを切に願いながら・・・

— 森の中で —

冬ざれの木々の間を縫うように、電動ノコギリのうなり声が森にこだまする。

まるで身体を切り刻まれるかのようなその音は、骨までが共鳴するようなふるえを覚える。

森に暮しはじめて、どれ程多くの木々が倒されていったことだろうか。人間にとってはすばらしい発明であるが、森の木々にとっては恐ろしい凶器となるその道具の威力はすさまじい。

朝の散歩の時には、たわわに繁らせた葉をふるわせ、木々達の奏でる音が風の道に満ちていたのに・・・終日森がさわがしく、電動ノコギリにおびえながら過ごした日の夕刻、音が途絶えた方向に出かけてみると、無惨に倒された大きな木が何本も横たわり、森の傷口のように大きく空が見える。

片手でゆうに持ち運びが出来る程に小さな、しかし、大きな力を持つその文明の道具にため息をつく。

もう随分昔、クリスマスツリーにと、樫の木を切ったことがあった。ノコギリと斧を使って、一本の樫の木を倒すのにどれ程の時間を要した

ことだろう。

極寒の澄みきった空気の森に、斧の音が響きわたり、一打ち斧を打ちふるたびに、香わしい木の香りがあたり一面に飛び散る。

それはまるで、一本の樫の木の、森に生き続けて来た歳月を聞きながらのような長い作業であった。

他の木を巻き添えにしないように、方向を定めた位置に地響きを立て倒れた時は、思わず歓声をあげたものであったが、その木の年輪を数えた時、木の生命を絶つことの行為に一抹の自責の思いにかられた。この木を愛して集った動物や鳥たちがきつといたはずであり、生かしかされる森の営みを思うと、人が自然と共生することの重みに、そこはかとな悲しみを思ったものである。

樫の木も今は、まびく程になく、クリスマスには手ごろな大きさの苗木を買い求め、鉢植えにし、翌年春を待つて庭に植えることにしている。時々ふと、自分の年輪を重ねるかのように、庭が増えていく樫の木と何を語り合おうかと、夜空にまたたく星を仰ぎ見る時、月の光に眠る夜、壮大な宇宙の小さな地球、その地球

という星の中の、小さな生命体にすぎない自分が果せる役割は何であるのかを問い続けるのである。

自然の与えてくれる恵みを、身に足りる少しを受け、清貧の身を正し、ひっそりと生きていたいと思う。

人は、絶滅危惧種と私のことを言うが、身は滅ぶとも、清らかな水でしか生きられない蛍のごとく、小さくも美しい光を放つように、心清らにいたい。

そして、自分の書く一行の詩が、人の心をあたたく満たし、美しい思いをよみがえらせる一滴の雫でありたいと願う。

文明の発達は、確かに人類を幸せにすると錯覚させるかもしれないが、急速に加速する文明のあり方は、自然と対話することを忘れた人類を限りない不幸に導いているのではないだろうか。

人は己の時代のみの豊かさや便利さを追い求め、飽くなき欲望に向って走り続ける。人類の犯す過ちは、魂を持つ生物を巻き添えにしながら、多くの生命を宿す地球をも危うくしてゆく。

人が生き、又、生を終える意味も、命をつなげていく行為の、一区間の

ランナーであるときどき、次の命を生かす使命を負っていることに気づかねばならない。

その為にも、自然は自分だけのものではなく、未来につなげてゆかねばならないことを・・・。

神の「みづち」は助けなど必要としないが、助け出されるといふプロセスにおいて愚かな私たちに身を呈して、自らの足元に穴を掘っているような文明の図式を気づかせようとしているのである。

「みづち」が千年もの昔から、二千年の私達に警告を発していたにもかかわらず、気づかずにはいた私達が、今悔恨の思いを込めて、三千年への未来に向け、メッセージを送る役割を果たせたらと思う。

人類が水のみならず、自然をおろそかにしてきたこと、又、人が人として忘れかけている心をとりもどしてほしいと切に願う。

地球のメッセージをたずさえた「みづち」は、「みづち」という姿をかりた地球そのものであり、いつの日か、日本が発信する地球環境を訴える音楽芸術として、世界を駆けめぐる日の来ることをさらに夢みながら・・・

「みづち」が上演されるたびに、私は「みづち」の心を確かめるため、森からほど近い六里ヶ原にひとりたずむ。

雪に輝くあの山のひとところ、苦しみの果てにたどり着いて、終章の「美しきふるさと」を書いた野反湖がある。もはや、心のふるさとでもある野反のほとりに、私も又、いくたびか心さまよわせる。

人が生きる姿を問う場所であると思える野反の姿が、永遠であり続けてほしいと願う。

真に人類と自然との共生を考える人々の中で「みづち」は生き続け、享受しあえる言葉となろう。

夕すげの咲く湖のほとり

つぶらなる

君待ちたまふ

眼裏のふるさと遠く

いくたびか心さまよふ

美しきふるさと

いつの日か

我帰らざらむ

美しきふるさと



森の探譜

(10)

近くて遠きもの

近くて遠きもの 宮のべの祭り

思わぬはらから 親族の仲

鞍馬のつづらをりといふ道

師走のつごもり 正月むつきのついたちのほど

枕草子 清少納言

年が新たまるたびに 枕草子のこの段を思い
出す

師走の晦と正月一日は 一日を置いただけな
のに去年こぞ今年ことしとなり 遠い隔たりを感じてし
まうのも不思議である

丹治たんぢ 富美子ふみこ

常に古典のなかで平安と平成を歩きつ戻りつ
している私にとって 千年前の平安は近く
むしろ去年は遠い

日々加速していく文明の中で 何か大切なも
のを置き忘れてしまいそうな不安にかられ
自分にとっての文明はこれ以上必要ないこと
に気付く 森に住む決断をして十数年になろ
うとしている

文明ははたして人類を幸せにするのだろうか
ということが私にとって最大の疑問であった
森に暮らす日々失われつつあった感性が蘇る

森は木々の香りで満ちている

音もなく降る雪の 雪降る音さえ聞こえ

森を吹き抜ける風の音は 森の物語を話して

くれているようにも聞こえてくる

文明は好むと好まざるに関わらず押し寄せて

くるが 受け入れることはあっても いつの

間にか私にとって無用のものとなっていく

今でも年が新たまると 部屋に香をたくこと

は守り続けていることの一つである

梅花ばいか 荷葉かよう 侍従じじゆう 菊花きくか 紅葉もみぢ 黒方くろぼう

六種むくさのたきものとして源氏物語にもしばしば

登場する

その中の冬の香りであり 公私に限らず慶事

にたく黒方を用いる

これらは練香ねりこうといわれるもので 香木を何千

回となく打ち砕き アマヅラの蜜や炭の粉な

どで練り 小さな粒に丸め甕などの器に入れ

池のそばに埋めたり 湿気が多い所で熟成さ

せたものである

香をたくための小さな炭団に火をつけ 香炉
の中の灰に埋め 灰押しと火箸 羽箒等はほうきで美
しく灰を整える

火箸で炭団までの火筋を垂直に通し 銀葉ぎんようを
のせる

その上に転び落ちないように成形した黒方を
のせる

暫くすると えも言えぬ香りが漂い始める

部屋にくゆらす香を空薫物そらだきものといい

衣服にたきしめる香のことを薫衣香くのえこうという

薫衣香は伏籠ふせごという道具を用いる

伏籠を組み立て着物をふんわりと被せ その

中に阿古多香炉あごとに好みの香をたく

その香りをゆつくりと着物に染み込ませる手

法である

私も着物を着る時は 前日に香をたきしめる

ことにしている

練香でもよいが香木そのものでもよく やつ

と伽羅きやらをたいてもふさわしい年齢となり 大

好きな伽羅を用いている

伏籠ふせご



毎年暮れの数日を暖かい海辺で過ごし その

里からひとかかえもある水仙の花を買い求め

母がしていたように一日の動線に合わせて家

中に生けてある

気品さえ感じられるその馥郁とした香りは

私にとって黒方とともに欠かせない新年の香

りである

暖房の届かない部屋部屋で 水仙の花はそば
に寄るだけで匂い立つように薫る

文明の狭間に揺れながら 遠い日をまさぐる

寒い冬 茶室の畳を踏みしめる時の 足袋を

通してもなお冷たい その記憶さえ懐かしく

蘇る

スイッチを押すだけですべてが叶う文明の中

では 人類が生きるために持っていた本能が

衰え 五感をも退化させていく

平安と平成 去年今年 決して戻ることので

きない隔たりの世界であるが 私のなすべき

事とは 失われつつある感性を三千年の未来

へ伝えることだろうか

空薫物そらだきもの

の黒方と 水仙の花の香りの打ちまじ

る中で 私の忘れものをみつけられそうな予

感がしている

森に問えば 風が教えてくれるに違いない

森の採譜

(4)

虫めづる姫君

開いたままの本や書き損じた原稿用紙の散らばる煩雑な書斎から逃れるように散歩に出ると 長時間細かい文字を追い続けていた目を青葉は優しく涙のように潤してくれる
 雨季を終えた森は深い緑をたたえ その影にトリアシシヨウマ チザケサシが揺れている
 やがて始まる避暑地特有の喧騒に 散歩に出る勇氣もそがれ 夏の間はひたすら森の中で息を潜めるように暮らす
 東京まで一時間余り 週末を別荘で過ごす人は多くなったとは言え 私のように一年中森

に暮らす人は珍しい

別荘の管理の人が道沿いの下草刈りをしていて 刈り終えたまだ草の匂いがする中からホタルブクロの花を四、五本 通り過ぎた私を追ってきて持たせてくれた
 紫のその袋の中から 今にも蛍が這い出してきそうなの花に 忘れようもない記憶がよみがえる
 蛍には幼い頃の最も懐かしい思い出があり いつも美しくせつなく私の胸をよぎる

丹治 たんぢ
 富美子 ふみこ

兄が自分の背丈よりも長い笹を振りかざし 空に舞う蛍を採ってくれた
 その笹の葉に潜んでいる蛍を見つけだし 螢籠に移してくれる得意そうな様子や 一振り で二、三匹もの蛍が採れた時のドキドキとするような嬉しさも 昨日のように蘇る
 また遅く帰った父が 眠っている私を揺り起こし 蚊帳の中に蛍を放ってくれたことや 寝ぼけ眼で見る蛍の光に照らされた父の手が異常に大きく見えたことなど
 その腕に抱かれながら眠ったかすかな記憶は 朝起きてみると 夢の中の出来事であったかのように思えたが 輝きを失った蛍が蚊帳の裾にうごめいているのを見て 夢ではないと知るのであった
 蚊帳の中の蛍の思い出は あの時と同じように いつも夢のようではあるが 父の示してくれた私への愛情は なつかしくそして温かく 今も私を満たしてくれる
 父母の年老いての子であったので 兄弟達よ

り共に過す日々の短さゆえなのか 凝縮され
た愛情を受けたようであった

子供の頃のある時期が過ぎるまで 私の興味
の示すがままに育ててくれた

子供心にも 小ききものの命の節理を目的のあ
たりにしながら 生きとし生けるものの命の
尊さを学んだのかもしれない

光つては止む 蛍は今も惑う時の心の中の標しるべ
である

清らかな水でしか生きられない蛍のように
私もまた 不器用と言われようと 凜と居る
ことを選ぶ

蚊帳の中はそのまま大きな虫籠のようで 時
には蟬もいた

幼いころの不思議は誰しもで きっと蟬にな
るところを見たいとせがんだのであろう

父は庭の木の下の幼虫を見つけてきて 蚊帳
の網目に這わせてくれた

しばらくはかたときも離れずに見ていたが
いっこうに蟬にならなかつたらしく羽化が始

まる真夜中には崩れるように眠ってしまった
と泣きじやくる私に母が言い訳をした

「虫めづる姫よ」と苦笑しながらそんな私に協
力を惜しまなかったのは父であった

後年 古典の研究がライフワークとなり 堤
中納言物語「虫めづる姫君」に出合い驚いた
父が「虫めづる姫よ」と私のことをからかつて

いるとばかり思っていたが はるか昔 平安
時代の末の 私とそっくりの虫好きの女の子
の物語であったのだ

人々の 花 蝶やとめづるこそ はかなくあ
やしけれ

人は まことあり 本地たづねたるこそ 心
ばへをかしけれ

虫めづる姫君 より

世の人々が 花よ蝶よと美しいものをもては
やすが あさはかなことだ 物の本質を知つ
てこそ奥ゆかしいのだと また毛虫が蝶にな
るのだと言い 皆が喜ぶ美しい絹も 虫がつ

くったものと 小気味よい

去年は 天蚕の幼虫をいただいて育てたが
小さな虫の神秘を驚きの目で見つめる幼い頃
の自分をまざまざと思い出した

コナラの葉を寄せた中に美しい黄緑色の繭を
完成させていく様子にあらためて感動した

すべて お金で処理をしてしまうことを知っ
た文明人は 出来上がった物の真価も見えず
その道程の遠さを知るよしもない

人の心の深さや優しさもそうであるように
寡黙な人にそつと渡される野の花に 心癒さ
れる

うれしきは

言葉少なにさし出さる

野守りの花のほたるぶくろの

丹治富美子

森の採譜

(6)

鈴虫協奏曲

一日の終わりは テラスの藤の椅子に座り
森を眺めて至福の時を過ごす

野外ステージの後ろにミズヒキソウがいつの
間にか花を咲かせ あまりの美しさにステー
ジに沿ってニメートル幅にはみ出さないよう
に石を置いた
ミズヒキソウは次々と増え 今では闇を背負
ったステージの後ろに緑の葉に支えられた真
っ赤なミズヒキソウがまるで舞台美術のよう
にステージを演出している
自然は思わぬ形で私の遊びに手助けをしてく

れる

イタリア人のピアニストの演奏を最後に 優
雅な集いも忙しさのあまり休会となっている
それでも音楽の仲間たちが時々訪ねてくれ
私一人だけの何とも贅沢なコンサートとなる
会えばそれはまた そこはかとなく楽しい芸
術談議が始まる
先日訪れたドイツ在住の指揮者に パソコン
を使った文章は出来上がってみると自分の文
章でないものになってしまっているので 作品を書
く時は手書きでする話をした

丹治 たんぢ
富美子 ふみこ

その指揮者の友人の作曲家が私と全く同じこ
とを言っていて パソコンを使つての作曲は
やめてしまったそうである
異なる分野であるのに その不思議な結末に
みんなで驚いた

私の詩は これまで国を越え多くの作曲家に
作曲され歌曲となっている

韓国のベートーベンと言われる作曲家は エ
ネルギッシュでほとぼしる情熱をぶつけたそ
の楽譜は ピアニスト泣かせと言われるほど
に難読である

しかし ピアニストはもちろんオペラ歌手た
ちは皆手書きの楽譜を欲する
ペンの強弱 色の濃淡 余白 演奏者は作曲
家の心のゆらぎを必死で捉えようとするのだ
作曲家もまた私の心のひだひだを感じるこ
とができると手書きの詩を欲しが
る
手書きに書き直した詩をファックスで幾度も
送った

さらに作曲に行き詰ると 朗読をしてほしい

と言ひ 真夜中の国際電話で受話器に向かつて朗読をした

芸術を生み出すために 詩と音は響き会うように融合し 苦しみの果てに一つの作品を生み出す

その遠い道程を知る演奏者は 私たちの歌曲を歌い涙する

その中に金鈴をふる虫ひとつ

高浜虚子

たくさん鳴いている虫の中に ひと際美しい金の鈴を振っているような虫がいるというのである

その虫は きつと鈴虫であろうと日本人であればこの作品の世界を共有することができる

私たちは あまたいる虫の名前まで正確に答えられなくとも 声の違いを聞き分けることができる

しかし この能力とも言える感性は 「日本人

の脳」の著者である角田忠信氏によると 日本人固有の感性であり 欧米人にとって虫の音は雑音にしか聞こえないらしい

そしてそれは 日本語を話すことで 脳に影響を与えその能力が備わるといっているのである

日本には四季があり その美しい四季を表わすための言葉が生まれる

さらにその言葉が 日本人の感性をより豊かなものにしていく

私たちは その感性において誇るべき民族なのかもしれない

またある脳科学者は 手書きで文字を書くとき脳全体が反応を示し パソコンで文字を打つと前頭葉の一部しか反応しないと解説し や

がて人類は猿に戻ると付け加える

様々なことがデジタル化していく中で 脳が必要でない判断を下した時 使われなくなつた機能は確実に退化していく

人類が猿になる話は まだ時間があるとしても 文字を書けなくなる危惧を覚える

文字を読むことができるが 書けるというのは錯覚にすぎない時がきつと来るであろう

大学の日本語の講義の中で学生たちに せめてラブレターは手書きで書きましよう 思いはきつと届くはず と付け加える

鳥たちのさえずりも薄暮の中でいつしか止み草むらからは早くも夜の演奏に向け オーケストラのチューニングのように虫たちが鳴き始めた

私を懐かしんで訪ねてくれた人たちとの思い出の夏も終わり 照明に照らし出されたミズヒキソウが焰ほむろのような赤を闇の中に浮かび上がらせている

誰もいない舞台上で 今まさに虫たちのコンサートが始まろうとしている

ひと際澄んだ音色は鈴虫であろう

どうやら今宵のプログラムは オーケストラを従えた鈴虫協奏曲のようだ

森の採譜

(19)

リスのお返し

屋根に落ちる木の実の音を追う秋の夜長は
眠れぬ夜のひつじを数えるのにも似て・・・
ひとつまたひとつ 落ちてはコロコロと転が
り 音は闇に吸い込まれるように消えていく
秋の森で忙しそうに働くのはリス
リスの動きは機敏で 遠くにいても動く気配
を感じとることが出来る
木の幹を 上へ下へと駆け上り駆け下り そ
して鳥と見間違えるように枝から枝へと飛ぶ
秋は 私もまたリスのように木の実集めに忙
しい

鬼胡桃は水につけて果肉を腐らせるが ざる
にあげ果肉を剥がす作業を残したまま 雑事
に追われ 一週間ほどテラスに放置していた
ある日 沢山あった胡桃が少しずつ少なくな
くなっていくことに気づいた
我が家はリスの通り道からは遠く 近づいて
くることはなかったが 寄り道をしたリスが
たまたまテラスに沢山ある胡桃をみつけたの
であろう
毎日 私のないすきに来ては冬の食料にと
せつせと運んで 森のあちらこちらに蓄えて

丹治 たんぢ
富美子 ふみこ

いるに違いない
私にとつても胡桃はお菓子作りや胡桃和えに
と大切な食料なので すべてをリスに提供す
るわけにもゆかず 考えあぐねた末 毎日一
個ずつ与えることにした
テラスの椅子の上に小さなかごを置き その
中に一個を入れておくと リスは毎日必ず持
つていく
朝が早いので どんな顔をしてその胡桃を持
ち帰るのか私にはわからないが きつと嬉し
そうにしているに違いない
ある朝階下に降りていくと テラスに動く物
の気配がする
そつと窓に近づくと リスであった
テラスに渡した長い棒に鳥のエサ台とブラン
コを吊るしてあり その下の石のそばは水場
になっている
その鳥のブランコにぶら下がってしっぽを左
右にふつて遊んでいる
しっぽは長く フワフワでブラシの花のよう

な形をしている

よく見るとリスの毛はあまりにも細いせい
か毛は沢山あるのに ねずみのように細く長い
しつぽが透けて見える

時々鳥のヒマワリを食べたり 水辺におりて
みたりと随分長く遊んでいった

それからは リスは私を驚かせるように不意
に現われるようになった

だが 決して私を見ようとはしない

鳥でさえ 私をじっと見つめるのに 目をあ
わせようもしない

気ままに遊んでいくだけで またあつという
間にいなくなる

夏の間は外で食事をするが テーブルに料理
を置いて コーヒーをとりに戻ったすきに
いつの間に来ていたのか 食パンをくわえて
走り去ろうとするリスを見た

食パンは リスには大きすぎるとみえ くわ
えた先端が上下にブカブカゆれている
手にあまる大きな食パンを 引きずったり持

ち上げたりと格闘しながらもあきらめること
なく持ち去った

おかげで 私の朝食は 少々かたくなったフ
ランスパンを食するはめになってしまった

そんな年月も経て 今ではリスとも互いを認
め合った仲ではあるが リスは私に接する態
度を崩そうとはしない

桜の木の病葉わくらばが散り始めた頃 樅の木の向こ
うに栗の木の枝が伸びていることに気づいた

樅と桜に挟まれた栗の木は上へ上へと伸び
幾分自由になった空間でやつと枝を広げるこ
とができるようになったのであろう

栗の木があったことにも気づかなかつたが
漆と栗は同じ樹林帯にあり 漆の木の近くに
は必ず栗の木があると聞いたことがあった

そして 漆にかぶれると栗の葉を揉んでその
汁をつけるとよいと言うことも・・・

漆の多い私の庭に栗の木があつても不思議は
ないが 栗の実の針に輝く露の美しさに見と

れながら 不意に訪れてはあつという間に去
っていく内気なリスのことが脳裏をよぎった

リスは胡桃のお返しに 好物の栗を私のそば
に埋めてくれたに違いないと

その時 はつと我に返るように気付いた
あわて者のリスは 埋めた場所を忘れると人
は言うが そうではないかもしれない

リスは木の実を食べ尽くすことなく 次世代
の森を夢に描いているのだと

幾万年もの森の営みの中で リスは立派に植
樹の役目を担い それを見事に果てしていた
のである

森は考えることができ 木も動物も人間など
よりはるかに高い能力を持ち 森を形成して
いるのである

そして 人間の言葉でない言葉で話し合っ
ているのだと

その時 不意にサワサワサワと風が立ち 森
がうなずくかのようにざわめいた

平安と平成

丹治 富美子
たんぢ ふみこ

二〇一一年三月十一日 東日本大震災は日本
中を震撼させる出来事であった
繰り返し繰り返し放映される津波の様子に
我が身に起きたかのように震えた
自然の脅威の前になすすべもない人類の無力
さを改めて知ることとなった

古典を紐解けば 日本の歴史書である日本三
代実録に大地震や火山の噴火が相次いで起き
自然の恐ろしさがつづさに記されている
この日本三代実録には平安時代（貞観十一年）
に起きた貞観地震と津波のことが記されてお

り 千年後に東日本大震災として再来した
我々がよく知る菅原道真二十三歳の時である
翌年高等文官試験を受けた試験問題では「地震
について論ぜよ」とあったという
この若き秀才は見事に合格し 日本三代実録
の編纂に加わることとなった
また鴨長明は 方丈記において

山は崩れて河を埋み 海は傾きて
陸地を浸せり 土裂け水湧き出で
巖割れて谷にまろび入る
山が崩れ川を埋め 海から襲ってくる津波

土裂けて噴き出す水とあるが 液状化現象
であろうか

二三十度ふらぬ日はなし

十日廿日過ぎにしかば やうやう間遠にな

りて 或は四五度 二三度 もしは一日ま

ぜ 二三日に一度など おほかたその名残

三月ばかりや侍りけむ

一日二三十回もゆれない日はなく 十日二

十日と過ぎたころ やつと間遠になつて一

日に四五度あるいは二三度になり やがて一

日おき 二三日に一度となり 三ヶ月くらい

は余震が続いていたと生々しく描かれている

古典を通して学ぶことは多く 年表で見る限

り地球上で起きることは 必ず繰り返しされる

ということである

【平安】

八六三年（貞観五年） 越中・越後地震

八六四年（貞観六年） 富士山・阿蘇山噴火

八六八年（貞観十年） 播磨・山城地震

八六九年（貞観十一年） 貞観地震・津波

【平成】

一九九五年(平成七年)兵庫県南部地震

二〇〇三年(平成十五年)十勝沖地震

二〇〇四年(平成十六年)新潟県中越地震

二〇〇七年(平成十九年)新潟県中越沖地震

二〇一一年(平成二十三年)東北地方太平洋沖地震

東南海地震も迫りつつあり 国民すべからく

平和な世であるようにとつけられた「平安」と

「平成」であろうが 奇しくも共に自然の中に

あって揺れ動いた時代でもあった

いにしへ人は力強く立ち上がり 雅の文化を

私たちに伝えた

はたして我々は三千年の未来へ何を伝えられ

か 平成の叡智が試される

火星にもかつて水があったことが証明され

火星の姿がやがては迎る地球の運命であるの

か 文明という名のもとに 便利さや快適さ

を求め続け スイッチを押すことで全てのこ

とが叶うという怠惰を知ってしまった人類が

自ら招く人類の滅亡の姿なのかもしれない

宇宙の摂理は計り知れないものであり その

壮大さを考えると 人類のすることなど小さ

なことに違いないが 自らの手で決して早め

てはならない地球の姿であろう

オペラ「みづち」は留まることを知らない文明

のあり方に疑問を抱き 己の足元を掘ってい

る図式を憂い いつかはこの美しい地球を人

類自らの手で破滅に導くことに気付いてほし

いと切なる思いで書いたものである

二〇〇〇年は まだ世の中では地球温暖化へ

の関心は薄く 専門分野の人たちの間で危惧

され始めたにすぎなかった

一九九七年京都議定書ができ ようやく地球

規模で考えられてきた時代であった

先進国である日本は 二酸化炭素の権利を後

進国から買うことに奔走していた

森に住んで風と話すとき あらゆる生命の根

源である「水」をテーマにすれば 文明のあり

かたにふと立ち止まらせるシグナルの役目を

果たせると思ったのである

水をはじめ豊かな自然の中で あらゆる生命

と共にあってこそ人類もまた生き続けられる

のである

舞台を千年の昔 平安に置き 二千年の我々

がオペラ「みづち」を上演することによって

三千年の未来にこのメッセージを送るとい

設定である

この美しいふるさとを守れ

この美しい星を永久とわに伝えるのだ

人類の愚かさを嘆き いさめるために現れた

「みづち」は地球そのものなのである

再び会うことなどないように

と言ひ残し「みづち」は消える

果たして三千年の未来はどんな世界だろうか